

物語に アメリカ精神史を 探る



国際コミュニケーション学部教授
成田 雅彦

なりた まさひこ

立教大学を経てアメリカに渡り、ブラウン大学大学院で M.A.、ケント州立大学大学院で Ph.D. を取得。専門はアメリカ文学、文化、精神史。著書に『ホーソンと孤児の時代—アメリカン・ルネサンスの精神史をめぐって』（ミネルヴァ書房、2012年。福原賞受賞）、編著として『アメリカン・ルネサンス—批評の新生』（開文社、2013年）、『ホーソンの文学的遺産—ロマンスと歴史の変貌』（開文社、2016年）、共著として『トランスアトランティック・エコロジー：ロマン主義を語り直す』（彩流社、2019年）、『繋がり：近代アメリカの知的独立と〈知のコミュニティ〉の形成』（彩流社、2019年）、『環大西洋の想像力：越境するアメリカン・ルネサンス文学』（彩流社、2013年）など多数。日本ナニエル・ホーソン協会 11 代会長。

はじめに

私の専門はアメリカ文学と精神史の研究です。精神史って何？と思われるかもしれませんが、普通の歴史が具体的な出来事や事件などを描きつつ大きな社会や文化の潮流を描いていくのに対して、精神史では社会や文化の深い層にあって、なかなか見えにくい、しかし、その社会のいわば根源を形成するような精神の流れを描き出すことを目指します。私の場合、とくに 19 世紀アメリカの文学や歴史、哲学を読み解いて、アメリカ精神の姿を明らかにすることが研究の中心です。というと、なにか難しそうですが、そんなことはありません。今日は、そもそもなぜ自分がこんなことを研究するようになったか、そして具体的にはどんな研究をして、どんな授業をやっているか、一端をお話させていただければと思います。

アメリカと自分——そもそものはじまり

子供のころからアメリカという国に興味がありました。きっかけはサイモンとガーファンクル (S&G) という

う歌手です。彼らの歌が好きで、ともかく高校、大学と憑かれたように聴いていました。その中で英語を学び、アメリカの基本も学んできたような気がします。たとえば「アメリカ」という歌。家を出て旅する青年が「僕はアメリカを探しに行くんだ」と語ります。まずこの言葉にグッときました。日本人は普通、日本を探して旅には出ません。日本とは自分自身であり、まわりの日常世界だからです。でもアメリカは違う。それは、目の前の世界であると同時にどこか未知のところにある理想です。それをアメリカ人は常に探しているのでしょう。不思議な国だなと思いました。これはどういふことなのか。もっとアメリカのことを学びたい。そう思いました。それはまた、どこか自分を探すことでもあるような気もしました。それが自分の出発点です。

いつかアメリカに行って暮らす。お金も特別な才能もない自分が、なぜそう確信したのかわかりません。しかし現実はその通りになりました。アメリカ文学を専攻して日本の大学院を出て、奇跡的に奨学金を得てアメリカに渡り、博士号を取るまで 4 年半を過ごしました。もちろんアメリカ文学を学びに行ったのですが、しかしそれ以上に、アメリカを見たいと思って



↑在学したブラウン大学



↑2018年に京都で開催した国際学会にて
日米ホーソン協会歴代会長たちと



↑国際学会で代表者として挨拶

いました。大学院の勉学は厳しく生活は貧しかったです。でも不思議な豊かさにあふれた日々でした。いろんな経験の中でアメリカの人々のことを少しずつ知っていきました。S&Gのアメリカとは全く別の世界でしたが、もっと広い知と感情の領域が目前に広がっていました。博士課程の大学院生として奨学金をもらうためにアメリカの学生たちに作文を教えたこともあります。学生たちは極東から来た国語教師(?)の私を奇異な目で見たりもせず、不思議と馬が合いました。やさしく寛大な学生たち。アメリカには感謝しかありません。

物語にアメリカ人の心を探る

研究対象にはアメリカ19世紀の文学を選びました。アメリカン・ルネサンスという最初の文学の黄金期があります。アメリカを形成する自由、民主主義、個人主義、多文化、あるいは多人種、宗教性などの概念——それらは、この時代の文学者たちが原型を創成したのです。私は彼らの作品を読み、アメリカ人がどのようにして出来上がってきたのかを研究するようになりました。ホーソンという作家をアメリカ文化に深く宿る「孤児の意識」から読み解いた本を書いたり、エマソンという詩人・哲学者の自然観がアメリカ精神創造にあってどういう重要性を持ったかを分析する論文を書いたりしています。最近の活動で大きいのは2018年に世界中から学者を集めて京都で開催したアメリカ文学の国際学会です。私はアメリカの友人の研究者と2人で実施責任者を務めました。3年準備に費やし苦労しましたが、大成功で、参加者に喜んでもらえました。小さな、しかし忘れられない異文化交流の一コマです。

精神史研究と言っても対象は多岐にわたります。たとえば、みなさんはディズニー映画やアメリカの映画をご覧になって、いつも同じようなパターンがあるなと思われたことはないでしょうか。物語の中で主人

公が苦境に陥る。もはや生きるか死ぬかに追い詰められます。そこで、アメリカの物語では天からの魔法ではありませんが、何か不思議な力が働いて最後の最後で奇跡的に解決します。これはなぜなのでしょう?それを精神史の文脈から研究するときれいに説明できるのです。それは、アメリカが基本的に宗教的な国家であること、それから、キリスト教の恩寵という概念を精神的に特権化させた伝統を持っていることと関係があるのですが、ここでは深入りしません。ちなみにイギリスはどうか。イギリスは主人公が抜き差しならぬ苦境に陥っても、天からの不思議な奇跡が降ってくることはないのです。代わりに何が起ころかという、遠縁のお金持ちの叔父さんが急に死んでその遺産が転がり込む!——そういう現実的な解決策を取ります。リアリズムを大切にするイギリスならではの話です。まさに国柄を表す文化の、そして精神の興味深い対照ではないでしょうか。

授業の風景

この前期はアメリカ白人の異人種との邂逅体験を精神史から読むという授業をやりました。インディアンに囚われた白人女性の物語、エドガー・アラン・ポーの短編作品と奴隷制の関連、映画『猿の惑星』と人種社会の構造、そうしたテーマを学生たちと追いかけてきました。まず文学や映画、そして史実から時代意識を読み取ることができることを教え、そのテクニックを教えます。学生たちは、小説はそんな風に読めるのか、などと結構驚いて面白がってくれます。83人の学生がいる講義科目で、毎回、リアクション・ペーパーと称して自分でそういう作品分析を行う作業をやらせてもらっています。終わりの方では、だんだん慣れて、こちらの驚くようなコメントを書いてくる学生もいました。自分の研究をしながら、そういう反応を授業後、フムフムと読んで楽しんでる。そんな日常を送っています。